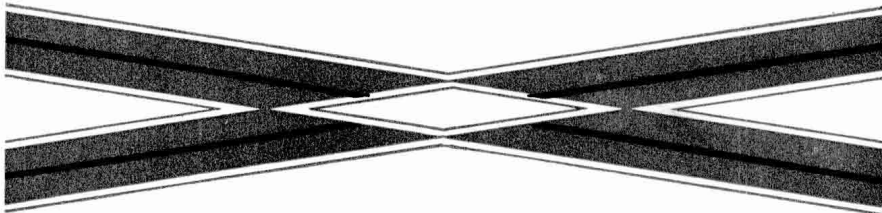


生島廣治郎

世界経済学著作選集

第一部 世界経済学説史の研究

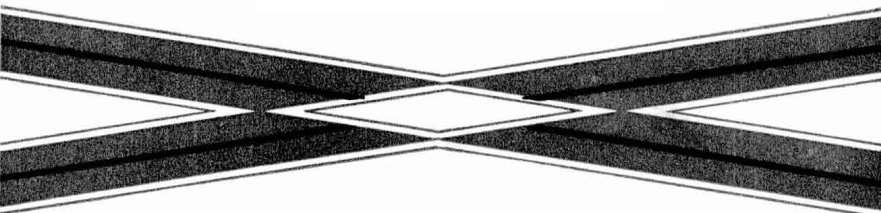
第二部 国際経済政策の生成



第Ⅲ卷



東京白桃書房神田



世界経済学著作選集 第Ⅲ巻

昭和49年7月20日 初版印刷
昭和49年7月26日 初版発行

著 者 生 島 廣 治 郎
編 集 者 世 界 経 済 学
著 作 選 集 刊 行 会
発 行 者 大 矢 順 一 郎
印 刷 者 内 山 一 郎

* * *

発 行 所 株 式 白 桃 書 房
会 社

101 東京都千代田区神田神保町1-42
電話(03)294-8911(代) 振替東京20192番

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

昭文堂印刷/日進堂製本

書籍コード 3333-964228-6915

第一部 世界経済学説史の研究

序

本書は世界経済学の学説史的研究であつて、なかならず、ドイツの世界経済学、特にキール学派の世界経済学の根本問題について研究し、あわせて、ソ連の世界経済学の基本問題を考察した。

本書第一編はまず十九世紀最後の四半期より第一次世界大戦にいたるドイツ・オーストリアの世界経済理論の生成過程を考察し、次にドイツの世界経済研究がハルムスの世界経済学において一応理論的、体系的に実を結んだことを明らかにした。当時の世界経済学の根本問題は、(一)世界経済とはなんぞや、(二)世界経済はいかなる形態で存在するか、(三)世界経済学は、いかにして成立するかに帰する。このうち、世界経済学成立の問題については当時ドイツ、オーストリアの学界において、きわめて活発なる討議が展開され世界経済学史上重要な問題を提示している。第二編は世界経済学の成立に関する論争を、ハルムスの世界経済学を主題として考察した。すなわちハルムスの世界経済学をまず詳細に解明し、しかる後、モーリッツ・ボンとカール・ディールとの世界経済学否定論を検討した。ボンとディールの説はハルムス世界経済学を全面的に否定せる代表的学説であつて、ハルムスの世界経済概念を否定し、これを対象とする世界経済学を否定している。したがつてこの両学説は特に詳細に検討し各論点について誤謬と疑問を指摘した。

当時の世界経済学肯定論にはシグムンド・シルダー、ルドルフ・コバチエ、ザルトリウス・フォン・ワルテルスハ

ウゼン、ゴットフリード・ツェブル等の説をあげることができるが、なかんずくシルダーはハルムスとほとんど時を同じくして浩瀚なる『世界経済発展傾向』第一巻を著わし、続いて第二巻を著わした代表的世界経済学者であるから、特に彼の世界経済学論を考察した。彼の世界経済概念はハルムスと異なっているが、世界経済の存在を当然とし、したがってこれを対象とする世界経済学は当然肯定さるべきことを主張している。

ハルムスの世界経済学が古典学派の世界経済学すなわち国際経済理論と、いかに相違するかの問題は、ハルムスの世界経済学の問題として、きわめて重要な問題であるが、この問題についてはボンやディールの批判においてもまた、当時の他の学者の批判においても特に徹底的に検討されていなかった。この問題の検討はその後オイゲン・ベラーとワルター・コチュニツヒとのハルムス世界経済学の批判を中心とする論争によって一応明らかにされた。この結果、キール学派は古典学派と世界経済の概念構成を異にし、世界経済学の対象においても方法においても、根本的に異なることが明確になった。ただし問題はこの討議によって完全に解決したものではないが、キール学派世界経済学の展開上、特筆すべき問題を提供している。

一般にハルムスの世界経済学はドイツ世界経済学のいわば前史的学説を継承してキール学派世界経済学の基礎を建設したものであって、これには第一次世界大戦以前における世界経済発展の趨勢と、ドイツの世界経済的立場とドイツの経済学界の水準とがその背景となっている。当時は自由主義経済の最後の繁栄時代であって、ドイツがビスマルク以来の世界政策を積極的に遂行せんとし、世界的一大雄飛を企図していた頃である。したがって世界経済の存在についても、その将来性についても、特殊の懐疑論者——シルダーのいわゆる *Skeptiker der Weltwirtschaft*——を除けばほとんど疑う者はなく、ただこれを対象とする世界経済学が世間の耳朵に新たな問題であつたにすぎない。

ハルムスの世界経済学は当時のドイツ経済学界の傾向に対し、新機軸を出さんとする彼の考案であつて、当時の世界の水準から見て彼の体系は形式的に一応整えられていたといえる。現にシルダーは彼の『世界経済論』第二巻を一九一五年上梓したとき、その序論においてハルムスの著書の堂々たる体系に対し、自著第一巻のはなはだ貧弱なりしことを恥ずかしく思うと率直に述べている。しかしハルムスは世界経済学の成立を、国民経済学と各個経済学に対し特に力説せんとするの余り、体系の形式的整備に走つた傾向が多分に認められる。したがつて体系の形式は整つていてもその理論的内容が充実せざる欠陥があつて、ここに彼の世界経済学に対する諸批判が、主として向かつていたものと概評することができる。もとより新たな試みであり、理論的欠陥は免れないが、これをもつて直ちに世界経済学の無用論を唱えることは誤りであるというまでもない。

ハルムスの世界経済学において、その後ドイツ理論経済学の進歩と世界経済自体の発展とに伴つて反省さるべき根本的問題が残されていた。けだしこれは一にしてとどまらない。ハルムスは第一次世界大戦が終了し、世界経済が漸次復興の緒についたとき、世界経済学について根本的再検討に着手した。当時はもはや世界経済についても世界経済学についても、世間では特に異とする者はほとんどなく、むしろ世界経済学の理論体系の完成についてハルムスに期待するところが少なくなかつた。

ハルムスはキールの世界経済学研究所を拡大強化するとともに、世界経済を動態的、發展的に把握することを企図して新たに世界経済の構造變動的把握を提案し、ドイツ経済学界に率先して構造變動的把握を提唱した。しかし理論的、根本的には世界経済の概念構成を検討し、世界経済を社会経済統合体 (Sozialwirtschaftsgebilde) としつゝ、かに把握されるかを根本問題としていた。これがために彼は社会統合体の理論的研究に着手し、社会統合体 (Soziales Gebilde)

は *Zur Einheit gestalte Mannigfaltigkeit* として把握されることを考案した(拙著『世界経済の基礎概念』第二編第七、八、十二章参照)。Leopold von Wiese はハルムスのこの考案を学界における重大なる貢献であると称賛していた。そして世界経済学が応用経済学たる関係上、ハルムスは進んで当時のドイツ理論経済学者、たとえば Gottl. Spann, Spain, A. Sommer 等の説に対抗して社会経済学の理論体系の根本問題を検討し、この業績については Hans Kretschmar が特に高く評価している(H. Kretschmar, *Die Einheit der Volkswirtschaft in älteren deutschen Wirtschaftslehre*, 1930)。ハルムスは社会経済学の理論を *Sozialwirtschaftsgebilde* として *Sozialwirtschaftsgefüge* として分類し、この体系によって世界経済学の体系を再建せんと企図したのである。しかしながら彼は世界経済学の体系的再建設を終わらざるうちに、突如病を得て忽焉他界したことは惜しみてもなお余りあることである。

第一次世界大戦以後は一般に世界経済学の研究が多彩なる各学派の展開によって空前の発展を呈していた。ドイツはもちろん、広く世界の経済学界を通じてそうであった。ドイツではキール学派の新たな展開を初め、経済学界の世界経済研究はいちじるしい進歩を示した。他方、国際連盟は世界経済の復興と再建設に対し自由主義経済理論の立場から大規模なる研究に着手し、古典学派はタウシックを初めオーリン、ハーバラー、ヴァイナー等によっていわゆる新古典学派を展開し、マルキシズムはソ連の世界経済学を展開し、実に多彩なる世界経済学各派の展開を呈したのである。本書はドイツの世界経済学、特にキール学派の世界経済学の研究を主題にしたから、ソ連の世界経済学の研究は従となった。しかし、ソ連の世界経済学は第一次世界大戦後ソ連における新興科学であって、現今対立せる二つの世界に対し、ソ連の立場よりせる独占資本主義批判であって、現今の世界経済学の研究上、重要な課題を示している。本書においては古典学派、新古典学派ならびに近代経済学派の展開せるいわゆる国際経済(貿易理論)学派の世

界経済学についてはほとんど立ち入らなかったが、この問題は後日の機会に譲りたい。ただし本書はあくまでも、世界経済学に関する学説史的研究に終始したものであって、世界経済学の基本問題は決して本書で尽きるものではなく、爾余の問題についても別の著書に譲りたい。

本書の刊行はつとに計画していたが、刊行に関して重大なる支障が生じて延び延びとなって現今にいたった。本書を執筆するについては旧制神戸経済大学ならびに現神戸大学経済学部、経営学部の諸教授ならびに元世界経済研究会のメンバーであった京都大学経済学部および大阪市立大学（旧制大阪商大）の諸教授より、多年にわたって啓発と鞭撻を賜わったことに深く感謝しなければならぬ。

昭和三十二年四月

著者識

目 次

第一部 世界経済学説史の研究

序

第一編 世界経済学の沿革

第一章 一九一四年以前のドイツおよびオーストリアにおける世界経済概念論	二
-------------------------------------	---

一 緒 言	二
-------	---

二 シュモラーおよびフィリップ・ボウイッチの説	三
-------------------------	---

三 アドルフ・ワグナーの説	七
---------------	---

四 世界経済文献	九
----------	---

第二章 一九一四年以前のドイツおよびオーストリアにおける世界経済存在形態論	三
---------------------------------------	---

一 ノイマン・スバルトの統計的研究	三
-------------------	---

二 カルヴェルの統計的研究	七
---------------	---

三	シルダーの実証的研究	三三
四	ハルムスの実証的研究	三三
第三章	一九一四年以前のドイツおよびオーストリアにおける世界経済学論	四二
一	ディチェルおよびツェプルの説	四二
二	ハルムスの説	四四
三	ドイツの世界経済学提唱の背景	五〇
第二編	世界経済学に関する論争	
第一章	ハルムスの世界経済学	五七
第一項	ハルムスの世界経済概念	五七
緒言		五七
一	歴史学派の世界経済概念構成の拒否	五九
二	各個経済とその涉外関係	六一
三	国民経済の本質および概念	六四
四	世界交通社会と国家の経済政策	六六
五	世界経済および世界経済政策の概念	七〇
第二項	ハルムスの世界経済学体系	七六

一 経済学の名称と分類	七
二 純粹社会経済学	六
三 応用社会経済学	六
(1) 私経済学と財政学	八
(2) 国民経済学	八
四 世界経済学的考察方法	八
五 世界経済学の構想	八
(1) 世界経済学総論	八
(2) 世界経済学各論	九
第二章 モーリッツ・ボンの世界経済学論	七
——ハルムス世界経済学の批判——	七
第一項 新興科学論	七
一 世界経済の概念	六
二 世界経済と国民経済との分離考察ならびに並立問題	一〇
三 世界経済関係は学問的新現象を提供するか	一〇
四 ボンの結論	一〇
五 ボンの批判の検討	一〇

第二項 世界経済本質論	一二三
一 問 題	一二三
二 国民経済および世界経済の分類原理	一二五
三 フィジオクラートおよび古典学派の世界経済論の解釈	一二九
四 国民経済および世界経済概念の検討	一三三
五 世界交通社会と国際分業論の検討	一三六
六 ボンの批判の検討(一)	一三三
七 ボンの批判の検討(二)	一三六
第三章 カール・デールの世界経済学論	一四三
一 総 説	一四三
二 国民経済学の対象	一四五
三 世界経済概念	一四七
四 国民経済から世界経済の類推比較	一四九
五 経済学の新たな問題と世界経済学	一五三
六 世界経済段階説	一五六
七 世界経済学有害論	一六〇
八 デールの世界経済否定論の検討	一六三

九	ディールの国民経済学および世界経済学論の検討	一九九
---	------------------------	-----

第四章	シグムンド・シルダーの世界経済学論	二七
-----	-------------------	----

一	ウィーン学界における世界経済概念に関する論争	二七
---	------------------------	----

二	世界経済に対する計画的干渉	二九
---	---------------	----

三	世界経済の Einheit の概念	三八
---	-------------------	----

四	シルダーの説に対する批評	四四
---	--------------	----

第五章	古典学派とキール学派世界経済学との比較研究	一八七
-----	-----------------------	-----

——ベラーのハルムス世界経済学の批判とコチュニツヒの反批判——

一	ハルムス世界経済学の出発点	一八七
---	---------------	-----

二	ケアンズの世界経済学	一九〇
---	------------	-----

三	国民経済および世界経済の異法則性	一九三
---	------------------	-----

四	両法則の異なる原因	一九五
---	-----------	-----

五	ハルムスと古典学派との概念規定の相違	一九七
---	--------------------	-----

六	古典学派とハルムスとの出発点の比較	一九九
---	-------------------	-----

七	コチュニツヒによるベラーの古典学派解釈の検討	二〇一
---	------------------------	-----

八	ベラーのいわゆる異法則性の検討	二〇三
---	-----------------	-----

九	ベラーのいわゆる論理的・認識的把握の検討	二〇五
---	----------------------	-----

十	キール学派世界経済学の対象	二〇八
十一	キール学派世界経済学の方法論	二一〇
十二	実存論的方法による普遍性	二二三

第三編 世界経済学の発展とその帰趨

第一章	世界経済学の発展段階	二三
一	キール学派世界経済学の特色	二三
二	世界経済学の発展段階	二三
第二章	第一次世界大戦以後からの世界経済学の躍進	二三
一	自由主義世界経済学の復興と発展	二三
二	ドイツの世界経済学の発展	二三
三	ソビエトの世界経済学の勃興と宣伝	二三
四	一九二九年の世界経済恐慌とアウトールキー論	二四〇

第四編 ソ連の世界経済学

第一章	マルクスの世界経済論	二四五
一	マルクスの世界経済概念	二四五

二	世界經濟の構成單位	二九
三	國際分業論	三三
四	外國貿易論	三三
五	資本輸出論	三六
六	國際支払殘高および為替相場	三七
七	むすび	三九
第二章 ナヒムソンの世界經濟学		
一	序 説	三六
二	従來の世界經濟概念の検討	三六
三	經濟發展段階説の検討	三七
四	マルクスの經濟發展段階	三七
五	國民經濟および世界經濟学段階	三六
六	世界經濟概念と世界經濟学	三八
第三章 ソ連における世界經濟の本質および世界經濟学方法論に関する諸學説		
一	総 説	三九
二	世界市場と世界經濟の同質論	三九
三	世界市場と世界經濟の異質論	四〇

目 次

viii

四 世界経済の本質と資本輸出論	三〇三
五 世界経済学方法論	三〇五

第五編 世界経済学と国際経済学との異同論

一 序 論	三一一
一 世界経済学軽視論	三一二
三 国際経済の概念	三二五
四 国際経済学と世界経済学との異同論	三二六
五 結 論	三三三

第六編 Reflections on Harms' Science of World Economy

Reflections on Harms' Science of World Economy	三三九
参考文献	三四一

第二部 国際経済政策の生成

著者カルバートン序文	三四一
------------------	-----